

ソムリエのバックボーンは高知の「おきやく」

田崎真也ワインサロン副支配人 阿部川知佐 (56 回生) (旧姓: 濱田)

現在、私は、世界一のソムリエ、田崎真也氏が主催する「田崎真也ワインサロン」というワインスクールで、講師として、また経営全般に携わる副支配人として勤務しています。

先日、久しぶりに帰高し、高知流の宴会に出ましたが、これこそ全世界に通用する「もてなし方」だあと、自分が育った環境を誇らしく思いました。ホストがビールとコップあるいは徳利とおちょこを持って、「ご返盃を繰り返しながらゲストを一人一人回ってご挨拶させて頂く。つい最近、お茶を習っている友人に聞いたところ、亭主(ホスト)が高知流飲み方と同じように盃を持ち招待客(ゲスト)を回ってご挨拶することを「千鳥の盃」と言うそうで、高知流飲み方は「茶の湯」の世界にも通じるのです。

私が高知で、「おきやく」という宴会の世界にデビューしたのは多分小学生低学年くらいの頃で、実際にお酒を飲んでいたかどうかは定かではありませんが、「ご返盃」という言葉を繰り返し大人にきちんとおしゃくをし、小学生

高学年の頃にはいっばしに、盃を交わした相手の盃の中身が空になっていないと、「まだ空いちゃあせん」と首を横に振り、返盃の盃を受け取ることを拒んでいたように記憶しています。そして中学生くらいになると、つがれた盃のお酒に口だけつける真似をし、相手の目を盗んで残りのお酒はテーブルの下に置かれていた灰皿に移すという高度なテクニックを身につけていたと思います。

私の実家は、土佐高から歩いて3分程のところの天神町にある酒屋で、当時は酒屋どうしの親睦を深めるために月に一度、各酒屋持ち回りで、「おきやく」を開いていました。今はもうありませんが、当時どこの酒屋にも「コップ酒」が飲めるカウンタールがあり、食事時などは家族が順番に店番をするため、小学生頃から、仕事帰りに一杯飲みに立ち寄る「コップ酒」のお客さんに一升ビンからお酒をつぎながら「表面張力つけちよくきええ」とサービスしていました。また両親の「女は自分の限度をしっちゃんといかん」という教育方針のものと、何かの折に少量のお酒を飲むことは許されていたので、土佐高を卒業し、青山学院大学文学部フランス文学科へ進学した頃には、「高知の酒屋の娘はさすがに酒が強い」という印象を周りに与えていたように思います。



そんなバックボーンを持つ私がワインに出会い、ソムリエの資格を取ったのは、全日空の国際線でスチュワーデスとして勤務していた時で、その時

は、自分が飲むためではなくプロとしてきちんとした知識を持つお客様にワインをサービスしたいと思ったからでした。現在、日本ソムリエ協会が認定する資格呼称は、ソムリエ(5年以上サービス業に従事し、現在も従事している人)、ワインアドバイザー(3年以上酒販業に従事し、現在も従事している人)、ワインエキスパート(一般のワイン愛好家、私の生徒さんでもあった女優の川島なお美さんが取得したのもこの資格)の3種類です。試験は1次試験と2次試験があり、1次試験は、電話帳ほどの厚さのある教科書から出題される筆記試験。膨大なワインに関する知識を暗記しなくてはなりません。もちろんフランスワインに限らず、イタリア、ドイツ、スペイン、ポルトガル、オーストリア、ハンガリー、ギリシャ、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、日本など世界中のワイン、そしてお料理、公衆衛生に至るまでの知識です。頭を振るとこぼれ落



ちそうになるまでなんとか知識をつめ込み1次試験に合格すると、口頭質問とブラインドテイスティングの2次試験が待ち受けています。私の時は、白ワイン、赤ワインとも2種類ずつの計4種類のグラスワインの外観、香り、味わいのコメントを書き、ぶどう品種、ワインの銘柄、産地、年代、価格、サービスする時のワインの温度、相性の良い料理を書き出すというものでした。そしてさらに、ソムリエだけに、「実技」という2次試験が課せられます。厳しい表情の試験官の前で、ワインのオリを取ったり香りを聞かせたりするために、本来ワインが入っているボトルから、デカントールというガラスびんにワインを移しかえる作業をします。ここでは、

今こんなことになっています

テクニクばかりではなく、サビスマンとしての素質もチェックされますので実際のお客様の前でやっているという想定のもと、清潔感のある身だしなみはもちろんのこと、はきはきした言葉づかいや、エレガントな身のこなし、好印象を与える笑顔なども重要なポイントになります。胃がしくしく痛くなるような合格率35〜50%の試験をなんとか突破し、合格通知と金色に輝くソムリエバッジを手にした時は、涙を流して大喜びしました。

現在は、その喜びを生徒さんに味わってもらいたく、資格を取るための認定試験準備講座を立ち上げ、8〜9割の合格率を誇っています。ワインを通じて人と人が出会い、一生の友達になれるように、高知の「おきやく」で培った「おもてなし」のサビスマン精神をベースにしてこれからも頑張っていきたいと思っています。

最後に、田崎真也ワインサロンでは、ワイン初心者のための講座や、田崎真也が直接指導する上級クラスまで様々な講座を催していますのでいつでもお気軽にお問い合わせ下さい

まだ、吹いています

三菱信託銀行 エコノミスト

岩井千尋 (42 回生)

恥ずかしながら、まだ、ラッパを吹いています。昭和37年の秋のことですが、ブラバン（吹奏学部）へ入部して緑青サビだらけの楽器を与えられて以来、ラッパ狂いと化して35年以上経つても、いまだにあちこちでジャズのトランペットを吹いておりま

す。ピアノ、ベース、ドラムをリズム陣にして、テナー・サクソとトランペットをフロントに構えたクインテットでの演奏が基本ですが、まずテーマをやってアドリブ・ソロを各個人に回します。まあ、たまに、自分だけしか解らないのかもしれないのですが、4小節くらい気に入ったフレーズが吹けるところがあります。

「毎月、渋谷で」
ここ5年ほど、毎月第2金曜日の夜、渋谷シーバード（〒306-8800）というジャズ喫茶で演奏会を開いています。出演者も聴衆も無料の気楽なコンサートには、ありがたいことにたくさんいる

な人々が来てくれまして、これまでジャズの虜である店主を筆頭に、ああでもない、こうでもない酒を飲みながら批評してくれます。前衛指向の個人タクシー運転手、最近プロのピアニストに転向した元麻酔医、チャリヤー・パーカー論を著したトビ職人、コルトレーン狂いの弁護士：



：と、実に様々な人々が集

まりますが、もう見事に上下

関係も利害関係もない、その

ブレンさが素晴らしいので

バンドに飛び入りしたことが

あります。テナーとトロンボーンが相手で大いに盛り上がり、司会者になんと「ザ、スシ、トランペッター」と紹介されて、大喝采を浴びました。

《出張先でも》
勤めは三菱信託銀行というところで、経済・金融の調査

皆のドイツ語は全然解らなかつたのですが、店のママが一

杯おこつてくれて、音楽には本当に国境がないと感激しました。

《大学で…》
昨年からは、非常勤講師としてですが、縁あって上智大学の経済学部で「資本市場論」という授業を持っていて、資料といっしょに「ライブのお知らせ」を配付します。

ジャズ研の部屋にも顔を出すのですが、ここだけは妙に嫌がられている雰囲気があります。これはひとえに「単位」を媒介にしての付き合いのせいかなあ。

《最近、高知でも》
高校を出てからずっと県外ですが、最近、年取った一人暮らしの母親を見舞つた

いこととでちよいちよい高知に帰ります。高知の大丸の北に「ジャスト・フレンド」(〒824-8872) というピアノ・

バーがあり、ここで高知一素晴らしいトリオが待ち構えて

くれているのです。土佐弁の中で吹くラッパは、酒のつま

さと相まって最高に心地よいことを知って、最近こじやんと「里心」がついてきました。

どこかで、土佐訛りのラッパを聴いたら、ひとこと声をかけてください。

思いでの先生方 中澤 節子先生 (79才)

母・中澤節子

長女 後藤 淳子 (36回生)



母は大正8年11月1日、東京で3人兄弟の長女として生まれました。この拙い文が皆様のお目に留まる頃には、80歳になつてはいます。でも私が書いている現時点では、まだ79歳です(ここの所がともうるさい。クレームが付かないよう正確な期さねば)。5歳の時、あの関東大震災に遭い、親子5人命からがら東京を逃げ出して、関西に移り住みました。兵庫県立第一神戸高女・高等科・英文科を卒業後、昭和16年の秋に父と結婚。翌17年に私、18年に妹とあつと言つ間にふたりの子持ちになつてしまいました。



昭和17年 母23才 淳子0才

19年の春に父に召集令状が来

て出征、20年の終戦の日を目前にした7月17日に戦死、とふたりの結婚生活は正味2年と少し位でしょうか。猛スピードであつてはなかつたもののひとり身、25歳でした。しかもふたつのコフ迄付いて…。もともと母には英語の教師にならなかつたという気持ちなど皆無だつたのだそつです。時代が時代だつたもので、女が外で働くなんて、普通の家庭の娘がする事ではなく、お茶・お華・料理…とお定りのいわゆる「嫁入り修業」なるものをしつかりやらされたとか。ただ英語が人一倍好きで、チヨツ

ト頑張つてみただけとの事です。「好きこそもの上手なれ」「芸は身を助く」というのが、実感を含めた母の口ぐせです。夫に死なれ、ふたりの子供と母親を抱えて、さてこれからどうやって生きて行くのか？ 愚案投げ首の竹の子生活を、



昭和41年 45回生と遠足で室戸へ

見るに見かねた知人が仕事の世話をしつてあげようと、母の履歴書を見て、「おまさん！この経歴じゃと先生の資格がありあせんかね？」と言つて下さつたらしいのです。自分に資格がある事さえ知らないという有様だつたようです。そして疎開していた父親の出身地である香美郡夜須町の中学校に、無事職を得る事が出来ました。その2年半後、ある方のご紹介で面接を受けた土佐高に、幸運にも採用されたのでした。以来、時間講師としての最後の一年を含めての48年間、ずっとお世話になつたという次第です。夜須中学の分を加えますと50年と半年。教師生活半世紀というわけですね。(ただ今、明徳義塾校にて記録更新中)

数多くの出会いや別れがあつたであろう48年間の母の土佐高生活のうち、私がすぐそばで、教師としての母を見ていたのは16年間だけです。ちょうど3分の1というわけ、



昭和47年 土佐高校庭で

私の思い出の中にある「母と土佐高」という事では、やはり32回生の方々を置いては語れないと思います。と言つたり、その他の学年の方々と交流を、私がいまだ知らないと言つた方が正しいのかも知れません。昭和26年、母が土佐高に就職出来たその年、時を同じくして入学されたのが32回生。つまり両者は「同期の桜」というわけなのです。その頃、私達女ばかりの4人家族は、学校近くの小さな古い借家にひっそりと暮らしていました。飼つていた犬で「チロ」という名のメス犬でした。その女の園(?)と

も言つべきあばら屋に、毎日毎日、入れかわりたちかわり誰も来ない日は無い位、常に誰かが来ていたように記憶しています。圧倒的に男子生徒で女生徒は4、5人、それもさつぱりとした威勢のいい、およそ「女」を感じさせない(失礼!)方々ばかりでした。

それが6年間続きました。さすが大学生ともなると、ほんどの方が県外に行かれたものだから、随分間遠にはなりました。それでも帰省の度にお顔を出して、母を喜ばせて下さいました。それは社会人となられた後もずっと続き、大半の方が老眼・白髪頭になつてしまわれた今に至つております。

年令的にはうって付けの4歳年上の男性が、あんなにたくさん出入りしていたのに、なぜか我が身にロマンズはひとつとして芽生えませんでした。最近になって、やっとその理由が分かりました。昨年の夏、母が上京した折に「淳ちゃんも一緒に」と食事に招



平成9年 病氣手術後自宅にて51回生と

いて頂いた時の事。Y君いわく、「あの頃、おれらあ野郎の目は全部、年若い美しき未亡人の方ばかりかし向いちゃったがよ。」「えー!ほんなら私と妹はおじゃま申すたが?」「あつたりまえよ、ガキは目

じゃなかったわえ」ですと。(この会話は、実のところもつと「人間味あふれる」と申しましようか、いや、いささか「生真い」とでも言った方が...。同窓会の会報には、あまりふさわしくない表現だったものですから、少々脚色してあります。)

この春、やっと土佐高から完全撤退。すんなり「ご隠居さん」に納まるかと思いきや、母の教師としての情熱はまだまだ失われてはいない、もつたないではないかと惜しんで下さる方々のご尽力で、明德義塾校に現場復帰致しました。

「今迄ガムシヤラに働いて来たんだから、あと残り少ない(?)人生、楽しく遊んで暮らしてもハチは当たらないよ。」と申しますと、「遊びは飽きるけど、仕事に飽きは来ない」「私は教える事が好き」「根っからの英語教師」「教師は天職」「生涯現役」...まあまあ好きなようにして下さい。

80歳になんなんとする今、上にはとくに遺言を過ぎた方々から、下は自分の孫よりも若い方達迄から、「先生」「先生」と言つて頂くのを見るにつけ、「教師冥利につきる」とはまさにこの事と、心の底からそう思います。私も何とか「普通のおおはさん」にさせようと、やっきになった時期もありましたが、ここ迄来たらもう応援するしかないという覚悟を決めました。あと何年続ける事が出来るか分かりませんが...

★出版★

- 41回生 黒鉄ヒロシ、中野孝次、如月小春共著 『犬は東に日は西に』 清流出版 1400円
- 40回生 塩田潮 『金神職地獄』 日本経済新聞社 1600円
- 29回生 竹内靖雄 『謎で解く日本人の行動学』 東洋経済新報社 1800円
- 34回生 田島征三、越水利江子作 『フレンド 空人の森へ』 教育画劇 1200円
- 34回生 田島征三 『いろいろなあつてもあるきつづける』 光村教育図書 1600円
- 34回生 田島征三、三絵、木村裕一文 『オオカミのこぼれ』 偕成社 1400円
- 37回生 野田正彰 『奈乱のロシア』 小学館 1000円
- 37回生 野田正彰 『庭園に死す』 春秋社 3500円
- 55回生 森岡浩 『プロ野球人名事典1999』 日外アソシエーツ 2800円
- 24回生 大原健士郎監修 『精神科ハンドブック6心理検査』 星和書店 4000円 (49回生吉岡等さんも関わる)
- 24回生 大原健士郎 『学校の先生のための心の診察室』 講談社 1400円
- 24回生 大原健士郎 『眠れる生活 不眠症を退治するための生治術』 ごま書房 850円
- 24回生 大原健士郎 『心の病 その精神病理 あるがままの自分と仮面の自分』 講談社 680円
- 24回生 大原健士郎 『誰にも起きる「心の病氣」の症例・110の答』 講談社 1600円
- 29回生 倉橋由美子 『毒薬としての文学』 (倉橋由美子エッセイ選) 講談社 1200円
- 51回生 坂東真砂子 『屍の声』 集英社 419円
- 51回生 坂東真砂子 『ラ・ヴィータ・イタリアーナ』 集英社 1200円
- 51回生 坂東真砂子 『身辺怪記』 角川書店 495円